

新副会頭に聞く“VIVID KYOTO”

第5回 立石 文雄 副会頭 オムロン株式会社 取締役会長

今回の新副会頭へのインタビュー企画では、未曾有のコロナ禍での社会的課題の解決に向けて企業が果たすべき役割、また起業家や若手経営者への期待を立石副会頭に伺いました。

**京都で培われた生きた知恵を
生きる力に変えていく！**

私は海外駐在が長く、足かけ13年間、シカゴやトロント、アムステルダムなどで過ごしました。2001年に京都本社に戻り、そのとき初めて京都は五感をくすぐる、「ほんもの」を知ることができた町だと気づきました。四季折々の佇まい、歴史に彩られた町並み、味わい豊かな食文化。『ほんもの』に触れ、五感が刺激されるからこそ、日々新たな発想を生み出せる町だと感じています。

また、京都はEU（欧州連合）によく似ていると感じています。EUはそれぞれの国が異なる個性や強みを持って融合し、巨大な地域統合体として世界の政治・経済に大きな役割を果たしています。

京都も同じように、例えば西陣織や京焼・清水焼などの伝統産業、そして電子・電気機器や医療機器、アミューズメントなどの近代型産業がそれぞれの個性を発揮しながらうまく融合しています。今、観光産業を中心に厳しい状況が続いていますが、多様な個性の融合が

原動力となつて一日も早く再生を成し遂げ、新たな成長へとつなげていけると確信しています。ぜひとも京都の生きた知恵を生きる力に変えていきたいですね。

**社会課題と真摯に向き合い
企業市民としての
役割を果たす**

コロナ禍で世界中が危機に陥る中、オムロンにおいても社会的課題を解決するためにグローバルな視点で様々な取り組みを進めています。スペインでは、ファクトリー・オートメーションの機器システムで使われている自社のコントローラーやセンサーの技術を活用して、医療現場で不足している人工心肺装置の開発・提供を行いました。また、血圧計や体温計、活動量計などで測定した生体情報をリアルタイムで病院等に提供し、通院時の感染リスクを低減する新しい遠隔診療サービスを開始しました。現在では、アメリカやヨーロッパで幅広く導入され、感染症対策のツールとして役立っています。

未曾有の難局を乗り切るために、

これまでの枠組みや常識にとらわれず、自社の技術を他分野に展開していく、あるいはオープン・イノベーションで他の企業と積極的にコラボレーションしていくことが大切です。企業市民として何ができるのか？ 私たち一人ひとりがその役割を意識することで、持続可能なより良い社会を創造できるのではないかと思います。

**オープン・イノベーションで
新たな価値を
生み出す仕組みづくり**

昨年、当社は「パートナーシップ構築宣言」を公表しました。これは、大企業と中小企業がパートナーシップを強化し、共存共栄で成長・発展を目指すもので、サプライチェーン全体の付加価値向上を大きな目的としています。日本の競争力を高めるために、企業数の99%以上を占める中小企業の成長は不可欠です。先ほど、オープン・イノベーションが大切だと述べましたが、加工賃や支払いサイトの問題の解決だけでなく、独自の商品、技術、サービスを多く持った中小

「企業市民として何ができ、社会的にどのような意義があるのか、
一人ひとりが意識すれば、持続可能なよりよい社会が創造できる」



企業の強みを生かし、オープン・イノベーションで新たな価値を創り出すようなプラットフォームづくりが必要だと考えます。

例えば、世界中の様々なパートナー企業、そしてシステムエンジニアと協力し、当社の搬送ロボットを使ってオフィスや倉庫を24時間自動で除菌する「除菌作業代行ロボット」の開発を行っています。また、舞鶴市と連携し、パートナー企業とともにこれからの地方都市が持続可能な「自律社会」として存続・発展していくための新しい住民サービスの提供に取り組んでいます。志を共にする大企業と中小企業、あるいは基礎自治体が一体となって

イノベーションを起こしていく、そしてその成果をスピーディーに社会的課題の解決に結びつけていく……こうしたパートナーシップに重きを置いた取り組みが、コロナ禍の時代を乗り越える大きな力となっていくに違いありません。

来るべき未来を予測し 持続可能なビジネスを創造

京都商工会議所では、次代の産業人材の育成を目指す「K-CAP」事業に取り組んでいます。今、新たなビジネスがどんどん生まれていますが、ますます高度化・複雑化する社会においては、未来

を的確に予測し、それに対応するスキルを磨くことが求められるでしょう。当社では、創業者の立石一真が1970年の国際未来学会で社会の発展を予測した「SINIC理論」を発表しました。そこでは今までの大量生産・大量消費の工業社会は終わりを告げ、2025年から自律社会、さらに自然社会へと移行していくと予測しています。リニアエコノミーではなくサーキュラーエコノミー、つまり製品が破棄され、再利用されるまでのサイクルすべてが、経済価値に組み込まれる時代がやって来るでしょう。

これから起業を志す若い人たちには、物事を判断する時に身内の「損得」ではなく、社会の「善悪」で判断し、自分たちの商品やサービスが社会的にどのような意義があるかを常に意識してほしいと思います。自ら揺るぎない判断基準を持ち、ビジネスを時代のニーズに応じた持続可能なものに育てていくことで、世の中にインパクトを与えるような価値を提供できるのではないのでしょうか。

しなやかな寛容性を磨き 強みを生かして まちの発展を目指す

副会頭に就任して1年余り、他都市の同等規模の会議所と比べても、京商は委員会の数が多く活動が活発で、大企業と中小企業が隔てなくまとまった日本でもユニークな組織の一つだと感じています。冒頭で述べたように、多様な産業が日々交わり、地域課題と向き合う中で、新たなイノベーションが生み出されているのでしょう。

私の座右の銘に「旅は寛容を教える」という言葉があります。私は海外駐在が長く様々な国や地域を旅行しましたが、そこでいろいろな人と出会い、議論し、人となりを知ることが、寛容性の大切さを実感することができました。今後も目の前の難局を乗り越えるために、一期一会を大切にしながら、京都経済・産業の発展に向けて尽力していきたいと思っています。